

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。皆様のご健勝で、この素晴らしい週末を楽しんでおられることをお祈りいたします。私たちが主の御名のもとに集うこの時、神様が一人ひとりに出会ってくださいますようにお祈りいたします。

1. *初めてお越しの方、そしてオンラインでご視聴の皆様、ようこそ。*

B. 礼拝をさらに進める前に、小学生のお子様たちを日曜学校の教室へ送り出しましょう。

1. 子供たちが移動している間に、ほんの数分間、子供たちのミニストーリーに関する最新情報をお伝えしたいと思います。
 - a. お気づきの方もいらっしゃると思いますが、当教会ではいくつかの分野、特に子どもミニストーリーにおいて、追加のボランティアを募集していることをお知らせしてきました。子どもたちに教え、イエス様へと導いてくださる方々を必要としています。
 - b. 毎週日曜日の朝、私たちは子どもたちがキリストについて——キリストがどのようなお方であり、一人ひとりのために何をしてくださったのか——という理解を深められるよう、年齢に応じた教室を用意するよう努めています。
 - c. 子どもたちを主の道に導く責任は、教会ではなく親にあることは承知しています。私たちの願いは、単に親のそばに寄り添い、日曜日の朝、1時間ほどお手伝いをすることです。
 - d. しかし、教会としてこれを実行することは、ますます困難になってきています。私たちが目指す、年齢に応じた様々な教室を運営するために必要なボランティアが、単に不足しているのです。
 - e. そのため、今月は幼児クラスと就学前クラスを一つに統合し、低学年と高学年のクラスも一つにまとめることとなりました。
 - f. これにより、皆様にもご理解いただけるであろういくつかの課題が生じています。1年生と5年生が混在する教室で教えるのは難しいものです。年上の子供たちの関心を維持しつつ、同時に年下の子供たちには理解できないような内容にならないように配慮しなければなりません。
 - g. 神の恵みと御力によって、私たちは最善を尽くします。しかし、さらなるお手伝いが必要です。
 - h. 子どもミニストーリーのディレクターであるズレマ・パイウォーター氏と話し合い、9月中はなんとかこの体制を維持する予定ですが、ボランティアの参加時間がこれ以上増えなければ、運営方法に何らかの変更を加えざるを得なくなります。
 - i. 具体的には、日曜日の朝の礼拝2回のうち1回のみでの子どもミニストーリーの実施、あるいは小学生の一部を対象としたクラスを完全に中止せざるを得なくなる可能性があります。
 - j. そのような事態にはならないことを願っています。私たちは、子どもミニストーリーの重要性と、子どもたちの理解度に合わせて教えることの大切さを心から信じています。また、聖堂での説教中に、子どもたちがじっと座っているか、静かにしているか、注意を払っているかを心配することなく、皆様が座って主の御言葉を聞く機会を提供したいと考えています

、子供たちが静かに座っているか、静かにしているか、あるいは聖堂での教えに集中しているかを心配することなく、皆さんにその機会を提供したいと心から願っています。

- k. 皆様にも、神の御心と、主からの知恵と導きが与えられるよう、共に祈っていただきたいと思います。私たちは主を敬い、主が与えてくださる時と機会を忠実に歩んでいきたいと願っています。
2. 奉仕を考えたことはあるものの、まだ一歩踏み出す勇気が持てなかった方や、奉仕の申込書に記入する時間が取れなかった方は、どうか祈りながら、今こそ一歩踏み出し、この必要を満たす手助けをする時ではないかと考えてみてください。
3. 私たちは、神様が働いておられると信じています。神様がこの教会の中で、またこの教会を通して働き続け、私たちのために計画してくださったことをすべて備えてくださると信じています。ですから、子どもミニストーリーに対する神様の備えと知恵が与えられるよう、ぜひ私たちと共に祈ってください。
4. 子どもミニストーリーでの奉仕について、あるいはその内容についてご質問があれば、私や、カルバリーで奉仕している他のボランティアの方々に、遠慮なくお尋ねください。

C. それでは、早速、今朝の聖書学習の時間に移りましょう。私たちはヨハネの福音書を順に学んでいます。今朝は第7章を締めくくりたいと思います。礼拝の締めくくりである聖餐式のための時間を確保しつつ、これを終えられることを願っています。

1. 2週間前、ヨハネによる福音書第7章の学びを始めた際、1節から13節までの「神殿での緊張」について取り上げました。当時、毎年恒例の仮庵の祭りのために、各地からユダヤ人たちがエルサレムへと集まってきていました。集まった人々の多くはイエスを待ち望み、イエスについて語り合っていました。しかし、祭りの初めにイエスはすぐにはご自身を明らかにされませんでした。
2. 先週は14～36節と「祭りの場における誤謬」について学びました。祭りの半ば頃、イエスはついに前に出て、大衆に御自身を現すことを決意されました。イエスは神殿に入り、人々に教え始められました。
 - a. しかし、イエスが教えを説くにつれ、多くの人々が様々な誤った結論や誤った信念に至り、人々をキリストから遠ざけるような誤謬を信じてしまいました。
 - b. イエスは群衆に語りかけ、人々が至りつつあったこうした多くの誤謬や誤った結論を正されました。
- C. イエスが群衆に語りかける中で、私たちは、イエスの苦悩と是正の多くが、宗教指導者たち——彼らがイエスを拒絶し、イエスを殺そうと画策していたこと——に向けられていたことに気づきました。
3. 今朝の聖書箇所は、先週の続きから取り上げ、37節から始まり、同章の終わりである節まで進みます。

53節までです。本日の学びのタイトルは「招きに対する憤り」とします。イエスは再び立ち上がり、群衆に語りかけ、御自身のもとに来るよう大胆に公然と招きかけます。ご想像の通り、この招きは神殿にいるすべての人々、とりわけイエスを殺そうとしている宗教指導者たちからは、あまり好意的に受け止められることはないでしょう。

4. 皆さんもすでにヨハネによる福音書第7章を開いておられることを願っています。ここカルバリーでの慣例通り、神と神の聖なる御言葉を敬うために、可能な方は全員、立ち上がっていただければと思います。
5. 私は自分の聖書から、今日の聖句を全文読み上げます。使用するのはNKJV版です。別の訳本をお読みの方は、私が読み上げる間、ご自身の聖書でできるだけ追いかけてください。ヨハネは、仮庵の祭りの期間中にエルサレムで起こった出来事の記述を続け、37節で次のように記しています... (R & P)

II. 概要：

A. 今朝の聖書箇所は、エルサレムの神殿で仮庵の祭りの最終日に起こった出来事を強調しています。

B. この箇所を読み進めていくにあたり、3つの簡単なセクションに分けていきます。

1. 最初のセクションはヨハネによる福音書7章37～39節で、「キリストの宣言」について扱います。ここでは、イエスが人々に大胆に御自身のもとに来よう招かれています。
2. 第二のセクションは40～43節で、「キリストをめぐる分裂」と、群衆のさまざまな反応に焦点を当てます。
3. そして、3つ目にして最後のセクションでは、「キリストに対する軽蔑」が明らかになります。特に宗教指導者たちから、キリストへの憎しみと軽蔑が露わに示されています。

C. それでは、最初のセクションである37～39節をもう一度見ていきましょう。ここでは「**キリストの宣言**」とその意義について考察します。37～39節をもう一度、私と一緒に読みましょう。

III. ヨハネによる福音書 7章37～39節：「キリストの宣言」

A. 37節の冒頭で、祭りの最終日、すなわちその祭りの大いなる日に、イエスが立ち上がり、祭りの半ばの数日前にそうされたのと同じように、再び人々に声を高めて叫ばれたことが記されています。

1. さて、これが祭りの7日目であったのか、それとも8日目であったのかについては、多くの議論があり、定かではありません。
 - a. レビ記第23章では、仮庵の祭について次のように記されています。「七日間、主への火による供え物をささげなければならない。八日目は聖なる集会とし、主への火による供え物をささげなければならない。それは聖なる集会であり、その日には通常の仕事をしてはならない。」（**レビ記23:36**）
 - b. したがって、実際の仮庵の祭りは7日間行われていました。7日間、イスラエルの民はエルサレムの都に集まり、仮設の小屋に住み、荒野で40年間どのように暮らしていたかを思い起こしたのです。
 - c. 祭りの7日間、彼らは神殿に供え物を捧げ、喜び祝うとともに、自分たちの居場所もないまま荒野をさまよった40年間における神の誠実さを語り合った。

- d. そして、8日ⁱⁱⁱに、聖なる集会が設けられることになっていた。それは安息日のように、通常の仕事を一切行わない休息の日であった。

- e. ヨハネが「祭りの最終日」と書いているとき、彼が7日目について言及しているのか、それとも⁸日目について言及しているのかは、私たちにはわかりません。

2. 「その違いは何だろう？」と疑問に思うかもしれません。あるいは、7日目か8日目かによって、何か意味があるのでしょうか？

3. 実は、ユダヤ教の口伝によれば、そこには重要な違いがあったことがわかっています。

- a. ユダヤ教の口伝の最初の主要な記録である『ミシュナー』によると、イエスが来られる数百年前に、特別な水の注ぎの儀式を行う伝統が確立されていました。それは、荒野での生活中に神が水を供給してくださったことを象徴するために、金の水差しから水を捧げるものでした。

- b. 祭司はシロアムの池まで下り、この金の水差しに水を汲み入れ、その後、周囲の人々が出エジプトの際の神の御業を記念して詩篇113篇から118篇までの「ハレル」を歌いながら、神殿へと向かって行進した。

- c. 祭司が神殿の敷地に着くと、「水の門」から入り、祭壇へと向かいました。そして祭壇の前で、この水を注ぎ、注ぎ口から神殿の岩の上に水が流れ落ちるようにした水盤に注ぎ込みました。

- d. この儀式は、彼らが荒野にいた間に神が水を供給してくださったことを象徴するものでした。旧約聖書に詳しい方なら、神が民の渇きを癒すために、二度にわたり岩から水を供給されたことを思い出されるかもしれません。

- i. ある時、旅の初期の段階で、イスラエルの民はモーセのもとに来て、飲むものが何もないと不満を訴えました。神はモーセに、杖を取ってホレブの岩を打つよう命じ、そうすれば岩から水が湧き出て、民が飲むことができると告げられました。（**出エジプト記 17:6**）

- モーセはその通りにし、イスラエルの民は皆、その岩から湧き出た水を飲むことができました。

- ii. この出来事は二度目にも起こりました。40年にわたる旅の終盤、カデシュという場所に宿営していたとき、イスラエルの民は再びモーセのもとに来て、飲む水がないこと、水がなくてその場所で死んでしまうだろうと訴えました。

- iii. そして再び、神はモーセに、岩からイスラエルの民に水を与えるための計画を示された。しかし今回は、岩を打つ代わりに、モーセが岩に語りかけるだけで、岩は水を湧き出させ、イスラエルの民に切実に必要とされていた水を提供することになっていた。（**民数記 20:8**）

- iv. 残念ながら、モーセは民全員の目の前で岩を二度も打ち、主の御心を誤って伝え、その結果、罰を受け、他のイスラエルの民と共に約束の地に入ることを禁じられてしまいました。
- v. しかし、モーセが岩に語りかけるといふ神の命令に従わなかったにもかかわらず、神はカデシュにあるその岩から、イスラエルの民全員とその家畜が満足するまで飲めるほどの豊富な水をおもてくださりました。（民数記 20:11）
- e. したがって、この金の水差しから水を注ぎ出す儀式は、祭りの7日間、毎日行われました。しかし、伝統によれば 8日目は行われませんでした。
4. そこで疑問となるのは、イエスがその言葉を語ったのが、水を注ぎ出した7日目のことだったのか、それとも水がなかった8日目のことだったのか、ということです。
- B. どちらが正しいと断定することはできませんが、仮庵の祭りに伴う儀式を理解することで、この場面におけるイエスの宣言の文脈や状況をより深く理解することができるのです。
1. 人々は過去7日間、神による水の供給を祝い、記念してきました。そしてイエスは群衆の中に立ち上がり、大胆にこう叫ばれました。「だれでも渴いている人は、私のところに来て飲みなさい。私を信じる者には、聖書が言っているように、その腹から生ける水の川が流れ出る。」
2. 人々が理解していなかったのは、彼らが祝って記念していた岩から湧き出た水が、キリストを象徴し、表すものだったということです。
- a. 使徒パウロは『コリントの信徒への手紙一』の中で、ユダヤ人たちが「皆、同じ霊的な食物（天からのマナを指す）を食べ、皆、同じ霊的な飲み物を飲んだ。彼らは、彼らに付き従った霊的な岩から飲んだのである。その岩とは、キリストであった。」（1コリント10:4）と記しています。
3. こうして、ここでイエスが宣言された言葉の重要性が明らかになります。この人々は、イエス・キリストの象徴であった岩からの水という、神の忠実な備えを振り返っています。そしてイエスは人々にこう叫ばれます。「だれでも渴いている者は、私のところに来て飲みなさい。」
- a. 「あなたがたは、岩から水を供給してくださった神の御業を祝い、記念してきた。わたしこそがその岩なのだ！ あなたがたの渴きを癒やすことができるのは、わたしだけだ。すべてがわたしを指し示しているのだ。」
- C. さて、イエスが与えてくださったこの招きに注目し、重要な点を確認しましょう。
1. 何よりもまず、この招きは誰にでも向けられています。どんな男性にも、どんな女性にも、どんな子供にも。
- a. あなたがこれまで何をしてきたか、どれほど失敗したか、あるいは自分が神からどれほど離れていると思っているかは関係ありません。イエスのこの大胆な宣言は、私たち一人ひとり、そしてすべての人に向けられているのです。

- b. 教会や宗教の中で育った人であろうと、この世とそのすべてに生きてきた人であろうと関係ありません。あなたが誰であろうと、この招きは誰にでも向けられています。
2. 渴きを感じる人なら誰でも。私たち一人ひとりの内には、神から来る、そして神によってのみ満たされる、人生の意味と目的への渴きがあります。
- a. ダビデは詩篇の中で、この渴きを次のように表現しています。詩篇42篇で、彼はこう記しています。「鹿が水の流れを渴望するように、わが魂はあなたを渴望します、神よ。わが魂は神、生ける神を渴望します。（詩篇42:1-2a）
- b. また、詩篇63篇では、次のように歌っています。「神よ、あなたは私の神です。私は朝早くあなたを求めます。私の魂はあなたを渴き、私の肉体は、水のない、乾ききった地で、あなたを慕い求めています。」（詩篇63:1）
- c. コラの子らは詩篇84篇で次のように記しています。「私の魂は、主の宮の庭を慕い、いや、それゆえに衰え果てようとしています。私の心と肉体は、生ける神を呼び求めています。」（詩篇84:2）
- d. 『伝道の書』は、神が人類の心に永遠を植え付けられたことを述べています。私たち一人ひとりの心の奥底には、永遠への渴望、意味と目的への渴望、そして墓の向こう側さえも超える満足と充実感への渴望があります。（伝道の書 3:11b）
- e. しかし問題は、多くの人々が、神のみが満たし得るその渴望を、この世の物事で満たそうとしてきたことです。彼らは、成功や物質的な富、あるいは他者との関係の中に、充実感や満足感、意味や目的を見出せると考えています。人々は、その充実感を求めて、薬物やアルコール、そしてこの世が提供するあらゆるものに頼りますが、結局は満たされず、さらに多くを渴望するばかりです。
- f. 預言者エレミヤは、神の民であるイスラエルの子らが二つの悪を犯した様子を描写することで、人類の問題を完璧に言い表しました。彼らは、「生ける水の泉」である神を見捨て、自分たちのために貯水池を掘ったのです——それは、水をためることのできない、ひび割れた貯水池でした。（エレミヤ書 2:13）
- g. どんなにその貯水池を満たそうとしても、そこには大きな穴が開いているため、決して満たされることはありません。それは壊れており、欠陥があるため、満足感を与えることはできず、私たち一人ひとりの内にある渴望を決して満たすことはできないのです。
- h. 私たち一人ひとりの内には、神によってのみ満たされる渴きがあるのです。
3. イエスは、「だれでも渴いている人は、わたしのもとに来なさい……」と言われました。
- a. イエスは人々をある宗教へと招いているわけではありません。規則や儀式、規定へと招いているのでもありません。イエスは人々を御自身のもとへと招いておられるのです。
- b. 「わたしのもとに来なさい！」教会に来なさい、カルバリー・チャペルに来なさい、聖書研究会に来なさい、ホームフェローシップに来なさい、このグループやあのプログラムに来なさい、などとは言っていない。いいえ、イエスはそのようなことは一切言っていない。イエスは「わたしのもとに来なさい」とおっしゃっているのです。
- c. キリスト教とは、教会に来ることではありません。イエスのもとに来ることです。私たちが本当

に必要としているのは、イエスのもとの来ることだと気づくことが、とても重要です。神の御子と出会い、御子と交わることです。

- d. 主は私たちの必要を満たしてください。渇いた魂を満たしてくださいるのは、教会でも、交わりでも、人間関係でも、友情でもありません。私たちに必要なのはイエスです。すべては主についてです。すべてはイエスのもとに来ることです！
- e. なんと素晴らしい招きでしょう。
4. 主は「わたしのもとに来て、飲みなさい」とおっしゃいます。「飲む」という動詞は、命令法の現在形で書かれています。これは、絶えず来て飲むようにという命令を表しています。それは、一度だけひと口飲むことでも、一度にがぶ飲みすることでもありません。主から絶えず飲み続けることなのです。
- a. それは、渇きを癒そうとする絶え間ない飲み方ではありません。むしろ、いくら飲んでも飽きることのない、満たされる飲み物なのです。あなたは主の良さを味わい、主こそが渇いた魂を満たす唯一の存在であることを発見したからこそ、何度も戻ってきて、ますます多くを飲みたいと願うようになるのです。
5. イエスは人々に御自身のもとに来て飲むよう招き、「わたしを信じる者は」と述べています。ここでも「信じる」という動詞は現在形で書かれており、単なる一度限りの信仰の告白ではなく、神への絶え間ない信仰、すなわち日々、季節ごとに神を信じ、信頼し続ける人生を象徴しています。
6. イエスは、聖書全体で述べられている通り、その人の心から「生ける水の川」が流れ出ると言われます。イエスはここで特定の聖句を引用しているのではなく、聖書の全ページにわたって記述されている内容を要約しておられるのです。
- a. イザヤ書12章3節では、救いの井戸から水を汲むことについて語られています。（**イザヤ12:3**）
- b. イザヤ書44章では、神が渇いている者に水を注ぎ、乾いた地に洪水を注がれる様子が描かれています。「わたしはあなたの子孫にわたしの霊を注ぎ、あなたの子孫に祝福を注ぐ」（**イザヤ44:3**）
- c. イザヤ書58章では、主が干ばつの時に私たちの魂を満たし、私たちの骨を強め、私たちが「十分に水を注がれた庭のようになり、水が尽きることのない泉のようになる」と記されています。（**イザヤ58:11**）
- d. イザヤ書53章はこう宣言しています。「ほら、渇いている者よ、みな水に来なさい。金のない者よ、来て、買って食べなさい。」（**イザヤ55:1a**）
- e. イエスは、ヨハネの福音書第4章で、井戸端の女に、ご自身が与える水を飲むように告げ、その水を飲む者は二度と渇くことがないと語られました。イエスはこう言われました。「しかし、わたしが彼に与える水は、その人のうちで、永遠の命へと湧き出る泉となる。」（**ヨハネ4:14**）
- f. このように、聖書は、主にあるこの満たされた人生を、水の泉のように、井戸や湧き水、あるいは噴水から流れ出る水の川のように描写しています。
7. ヨハネによる福音書第7章にあるこの描写は、単に満たされるだけでなく、あふれ出る様子を描いています。イエスは、「その人の心から生ける水の川が流れ出る」と語られました。

- a. その意味するところは、神があなたのすべての必要を満たし、満たしてくださるだけでなく、あなたの人生からあふれ出させ、あなたの人生を用いて、他の人々へと神の水を運ぶ導管として用いてくださるということです。
- b. 私たちの生活は、主から来るこの魂を満たす水が流れる川のようなものとなるでしょう。それは私たちを満たし、そして私たちから溢れ出し、私たちが神の満たす御恵みの導管として振る舞うことで、周囲の人々に影響を与えるのです。
- D. さて、ヨハネは39節で解説を加えており、イエスがこれを特に、御自身を信じる者たちが受けることになる聖霊について語られたのだと教えています。なぜなら、聖霊はまだ与えられておらず、イエスはまだ栄光を受けられていなかったからです。
1. この川が私たちの中に入り、私たちから流れ出る手段は、聖霊を通してです。
2. ご存知のように、誰かがキリストを信じるようになると、御霊によってキリストの体へとバプテスマを受けます。これが、私たちが救われた時に起こったことです。おそらく私たちはそれを知らず、理解もしていなかったでしょう。私たちが知っていたのは、自分たちが救い主を必要とする罪人であり、神に祈って罪から救い出し、神の家族として受け入れてくださるよう願ったということだけでした。しかしそのとき、私たちは聖霊によってキリストの体へとバプテスマを受けたのです。そして私たちは主と一つとなっています。神の御霊が来て、私たちの内に住まわれたのです。
- a. ガラテヤ人への手紙第4章では、神が御子の御霊を私たちの心に遣わされたことが語られています。[**ガラテヤ4:6**]
- b. コリントの信徒への手紙第一では、私たちの内に住まわれる御霊によって、私たちの体が神の神殿となったことが述べられています。（**1コリント3:16; 6:19**）
- c. もしあなたが今朝、信者であるなら、神の御霊はあなたの内に住まわれています。しかし、イエスがここで語っておられるのは、それではありません。イエスは別のことを語っておられるのです。それは、イエスが栄光を受けられた後、すなわち、十字架の死、復活、そして天への昇天を経て、父なる神の御前で栄光をもって迎えられた後に起こった出来事についてです。
- d. これは、ペンテコステの出来事、すなわち聖霊が人々に臨み、彼らに力を与えて、周囲の世界に対してキリストの証人となるようにされたことを指しています。
- e. ご存知のように、弟子たちはヨハネ20章21節で、イエスの十字架の死と復活の後、しかし昇天の前という時期に聖霊を受けました。
- f. 弟子たちがユダヤ人を恐れて扉を閉めて集まっていたところへ、イエスが来て彼らの真ん中に立たれ、彼らに平安を告げ、父がイエスを遣わされたのと同じように、彼らを遣わされました。21節には、「こう言われた後、イエスは彼らに息を吹きかけ、『聖霊を受けなさい』と言われた」と記されています（**ヨハネ20:21**）。
- g. 弟子たちはヨハネ20章で聖霊を受けましたが、その後、イエスは弟子たちにエルサレムにとどまり、そこで「父の約束」を待つように命じました。イエスは、「あなたがたは、わたしからそれを聞いた。ヨハネは確かに水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、もう間もなく聖霊によるバプテスマを受けることになる」と言われました。（**使徒1:4-5**）

- i. つまり、彼らはすでに聖霊を受けていたのですが、神は、彼らが聖霊のバプテスマを受けるといふ、別のシナリオを描かれたのです。そこでは、聖霊が彼らの上に臨み、いわば彼らを満たし、彼らに力を与えることになるのです。
- h. イエスはこう言われました。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤ全土、サマリア、そして地の果てまで、わたしの証人となる。」
(使徒行伝 1:8)
- i. そうもちろん、これはペンテコステの日に成就しました。神の御霊が弟子たちの上に降り、神殿にいたすべての人々の前で、彼らに証人としての力を与えたのです。
- j. その日、弟子たちが人々に奉仕した結果、約3,000人が救われました。弟子たちは単に聖霊に満たされていただけでなく、聖霊によって力を与えられていたのです。神の御霊が彼らの上に臨み、彼らを通して働き、流れ出たのです。それは、ヨハネの福音書第7章に記されているように、彼らの心から流れ出る「生ける水の川」のようでした。

3. ですから、イエスのこの大胆な宣言は、御自身のもとに来て聖霊を受け、聖霊の力を授かるよう招くものです。
 - a. 神は、単にあなたを満たすだけでなく、あなたからあふれ出させ、あなたを通して働き、周囲の人々に奉仕して下さるのです。
 - b. 神が提供して下さるのは、単なる満たしだけではなく、満たし以上のもの、すなわち私たちの中から溢れ出し、周囲の世界に影響を与える聖霊の溢れです。神は、聖霊に満たされ、聖霊の力を与えられた人生を私たちに提供してくださっているのです。
 - c. それは救いへの招きであり、神があなたの中に来て住まれ、神があなたを通して流れ出るようになるための招きです。
4. そして、私たちが自問すべき質問は、この御申し出を受け入れたかどうかだと思います。私たちの人生は、今どのような姿をしているのでしょうか？
 - a. 私たちの人生は、神の聖霊の注ぎを現しているのでしょうか。もしあなたが今朝、救われたのであれば、あなたの中には聖霊がおられます。しかし、聖霊はあなたからあふれ出し、あなたを通して働いているのでしょうか。
 - b. あなたは神の御霊の「水路」や「導管」となっているのでしょうか、それとも単に「容器」——御霊を蓄える貯水池——に過ぎず、自分の人生に注がれる神の御霊のあふれる力を体験していないのでしょうか？
 - c. キリストが差し伸べてくださる招きは、渴いている人々が単なる「器」ではなく、神の聖霊の「流れ道」となることです。
 - d. 私たちの生活が、イエスが私たちに与えてくださるものを映し出すものとなりますように。私たちが、イエスの招きを受け入れ、イエスのもとに来て、私たちの人生に注がれる神の聖霊のあふれるような力を受け取る者となりますように。
 - e. 私たちが御霊に導かれて歩み、御霊の実を現し、私たちを通して働く御霊の力を体験することができるよう。

E. 本文に戻り、40～43節の「キリストをめぐる分裂」について扱った次の節に進みましょう。

IV. ヨハネによる福音書 7章40～43節：「キリストをめぐる分裂」

- A. 祭りの最終日、その場でイエスが大胆に宣言された言葉を聞いた多くの人々が、イエスに反応を示しました。そして、その反応はさまざまであり、人々の間に大きな分裂を引き起こしました。
1. ある人々は、イエスがその預言者であると考えました。
 - a. これは、はるか昔、申命記18章でモーセが語った預言を指しています。申命記18章15節にはこう記されています。「あなたの神、主は、あなたたちのうちから、あなたたちの兄弟の中から、わたしのような預言者をあなたたちのために立てられる。その者の言うことを聞きなさい。」（申命記18:15）
 - b. 主はモーセにこう言われた。「わたしは彼らの兄弟の中から、あなたのような預言者を彼らのために立て、わたしの言葉をその口に授け、わたしが彼に命じることをすべて彼らに告げさせる。」（申命記18:18）
 - c. 民の何人かが「まことに、この方がその預言者である」と言ったとき、彼らが指していたのはこの方でした。
 2. イエスがキリストであると考える者もありました。
 - a. 英語の「Christ」という語は、ギリシャ語の「christos」に由来し、単に「油注がれた者」を意味します。これはヘブライ語の[maw-shee-akh]、すなわち英語で言う「メシア」と同じです。これらの言葉はすべて同じ意味を持ち、単に「油注がれた者」を意味するのです。
 - b. ある人々は、イエスは「預言者」ではなく、「メシア」、すなわち「油注がれた者」であると結論づけた。
 - c. 当時、多くの人々は、メシアの到来に先立って預言者エリヤが現れ、モーセのような預言者が付き添うと信じていました。エリヤが道を整え、メシアはむしろ軍事的な指導者となり、その預言者は霊的な指導者となるはずだと考えられていたのです。
 - d. そのため、洗礼者ヨハネの宣教活動中、人々は彼のところに来て、彼が誰なのか尋ねました。ヨハネは自分がキリストではないと告げたため、人々は「では、あなたはエリヤなのか？」と尋ねましたが、彼は「違う」と答えました。次に「あなたは『その預言者』なのか？」と尋ねると、彼は再び「違う」と答えました（ヨハネ1:21）。
 - e. 人々は、エリヤ、預言者、そしてメシアがそれぞれ別々の人物であることを期待し、待ち望んでいた。エリヤは、人々に悔い改めを呼びかけ、道を整える説教者となるはずだった。預言者は来て、神の御言葉を大胆に語り、おそらくモーセが行ったような奇跡のいくつかを現すはずだった。そしてメシア、すなわちキリストは、彼らを束縛から解放し、彼らを統治する軍事指導者として現れるはずだった。
 3. 中には、キリストがガリラヤから現れるのかと疑問を抱く者もいた。
 - a. ガリラヤは軽蔑されていた場所でした。異邦人で溢れかえり、彼らに占拠されていた場所でした。それは、一世紀のユダヤ人、とりわけエルサレム出身者にとって、いわゆる「貧民街」のような場所だったのである。
 - b. だからこそ、フィリポが「モーセの律法や預言者たちが書いたその方、すなわちヨセフの子ナザレのイエスを見つけた」と言ったとき、ナタナエルはあのように反応したのです。ナタナエルは、「ナザレから良いものが生まれるだろうか」（ヨハネ1:46a）と答えました。

- c. ナザレはガリラヤ地方にある町でしたが、その地方からは何一つ良いものは生まれないと
いうのが、一部の人々の見方でした。
4. ある人々は聖書について語り、キリストはダビデの子孫から、またベツレヘムの町から来ると書か
れていると述べた。
- a. これは事実であった。神はダビデに、その子孫の中から、永遠にその王座を治める者が現れる
と約束されていたのである。
- b. サムエル記第27章にはこう記されている。「あなたの生涯が満ち、先祖たちと共に眠るとき、
わたしはあなたの後に、あなたの身から出るあなたの子孫を立て、その王国を確立する。彼は
わたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座を永遠に確立する。わたしは彼の父と
なり、彼はわたしの子となる。」（サムエル記第二7:12-14a）
- c. また、メシアがベツレヘムから来られるということも真実でした。ミカ書5章2節にはこう記され
ています。「しかし、ベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの千の町の中でも小さいが、それ
でも、あなたから、イスラエルを治める者が、わたしのもとに出て来る。その者の起源は古く、
永遠の昔からある。」（ミカ5:2）
5. こうして群衆の間には大きな分裂が生じ、それぞれがイエスについて自分なりの結論に固執し、自分
たちは正しく、他の人たちは間違っていると考えていた。
- B. しかし、彼ら全員が見落としていたことが一つありました。彼らは皆、同じパズルの異なるピースを
それぞれ持っていたのです。そして、それらをすべて組み合わせるだけで、すべてがイエスにおいて
一つにまとまることに気づくはずだったのです。
1. イエスこそが、来るべき預言者なのです。ペテロは、後に『使徒行伝』第3章で、このことを大胆
に主張します。そこで彼は、人々にイエスについて説教する際、申命記18章を引用しています。[
使徒行伝 3:22]
2. イエスはキリスト、すなわち神に油注がれた方です。父なる神によって遣わされた方です。
3. イエスはガリラヤ地方の出身です。しかし、人々が気づけなかったのは、まさにそこが、神がメシア
が現れると予告された場所だったということです。
- a. イザヤ書第9章には次のように記されています。「しかし、苦しめられている者には、暗闇が臨
むことはない。かつて神はゼブルンの地とナフタリの地を軽んじ、その後、ヨルダン川を越えた
海の道沿い、異邦人のガリラヤにおいて、さらに激しく彼女を苦しめられたが、『暗闇の中を歩
んでいた民は、大いなる光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に、光が輝いた。』」（
イザヤ書9:1-2）
- b. イザヤが異邦人のガリラヤに輝くとして預言したその光は、他ならぬメシアそのものであった。
そのことは、第9章のほんの数節後に、イザヤがその光を「私たちに生まれた子」であると特定
していることから分かる。「見よ、私たちに子どもが生まれ、私たちに息子が与えられた。その
肩に統治の重荷がのしかかる。その名は『驚くべき者、助言者、全能の神、永遠の父、平和の君
』と呼ばれる。」（イザヤ書 9:6）

- c. 私たちがほぼ毎年のクリスマスシーズンにこの聖句を読むのは、それがイエス・キリス
トによって成就されたことを知っているからです。
- d. つまり、人々は誤解していたのです。彼らは、メシアがガリラヤで光として輝くことを明確に述
べているこのイザヤ書の預言を見落としていたのです。
4. イエスはガリラヤのナザレと結びつけられていましたが、実際にはベツレヘムという小さな町で生ま
れたことを私たちは知っています。
- a. マタイとルカの両方の福音書は、イエスがベツレヘムで生まれた様子を描いています。繰り返
しになりますが、私たちはほぼ毎年のクリスマスにこれらの記述を読みます。
5. そして、イエスは実際にダビデの系譜に連なる方でした。
- a. ルカによる福音書第3章によると、イエスの実の母であるマリアは、ダビデの息子ナタンを通
じてダビデの系譜に連なっていました。[ルカ 3:31]
- b. 一方、イエスの養父であるヨセフも、ダビデの系譜に連なっていました。ヨセフはイエスの実
の父ではありませんでしたが、万が一問題が生じたとしても、その基準を満たす人物でした。
マタイによる福音書第1章によると、ヨセフはソロモンを通じてダビデの系譜に連なっていまし
た。[マタイ1:6]
6. つまり、人々は断片的な知識は持っていたものの、それらをすべて結びつけて、自分たちの前に立
ち、自分たちを「私のもとに来なさい」と招いているその人物こそが、まさに自分たちのメシアで
あることに気づくことができなかったのです。
- a. 彼らは、特定の側面だけに固執し、他の断片がどのように組み合わせあって、自分たちのメシ
アがどのような存在であるかという、より完全で深い全体像を描き出すかを考慮しなかった
ために、そのことに気づけなかったのです。
- b. 彼らが持っていた情報はすべてイエスを指し示していたのに、人々は単にそれらをすべて結び
つけることに失敗したのです。そして、すべてがどのように結びつくのかを見抜けなかったた
めに、人々の間に分裂が生じてしまいました。
- c. 私が学んでいるとき、聖霊が私の心に、今日でも神の教会の中で、こうしたことがどれほど多
く起きているかを強く印象づけておられるのを感じました。人々は、特定の真理に固執したが
る一方で、それが他の断片とどのように結びつくかを見ようとはしません。
- i. 人々は、ある聖書の真理を擁護する一方で、別の真理を軽視したり、無視したり、あるいは
否定さえしたりします。その結果はどうなるでしょうか？ 分裂です。キリストの体が分断さ
れてしまうのです。
- ii. 人々は、神の教義の多くが「どちらか一方」ではなく、「両方とも」という性質のものだ
と気づいていません。
- iii. 人々は、神の主権と人間の責任をめぐって分裂しています。ある人々は一方を擁護し、も
う一方を無視したり否定したりします。しかし、これは「どちらか一方」という状況では
ありません。両方が真実なのです。
- iv. しかし、聖書の全体像を見据え、バランスの取れた視点を堅持する代わりに、人々は本来
分裂すべきではない事柄をめぐって、キリストにある兄弟姉妹から離れ、争ってしまうの

です。悲しいことですが、今朝の聖書の箇所に見られるように、これは決して新しいことではありません。

V. これらの人々は正しい情報を持ち合わせていましたが、それらをすべて統合して自分たちのメシアを見出すことができず、結局、群衆を分裂させてしまいました。

C. 最後に、宗教指導者たちによる「キリストへの軽蔑」について扱った箇所を、手短かに見ていきましょう。44節から53節まで、私と一緒に読んでください。

V. ヨハネによる福音書 7章44節～53節：「キリストに対する軽蔑」

A. これらの節では、宗教指導者たち——パリサイ人や大祭司たち——が、キリストや、キリストを支持しているように見える者、あるいはキリストに同調する者たちに対して抱く軽蔑と憎悪が語られています。

1. キリストの言葉に心を奪われ、手ぶらで戻ってきた役人たちに、彼らは「惑わされた」「道を踏み外した」「誤った方向に導かれた」と非難しました。
 - a. 彼らは自分たちこそが真理の唯一の伝達者であると自認し、支配者たちやパリサイ人の誰もイエスを信じていないのだから、イエスに心を動かされた警備兵たちは愚か者だと非難した。
 2. 群衆に対しては、無知であると非難した。律法の知識がないと。そして、彼らは呪われていると断じた。
 3. ニコデモに対しては——彼こそが、自分たちがこれほど誇らしげに知識があると主張する律法の基準に従うよう彼らに求めようとした同朋の一人であったにもかかわらず——彼らは、彼を反逆者であり裏切り者だと非難した。すなわち、先に述べたように、ユダヤのエリート層から異邦人の影響によって汚されたと見なされ、軽蔑されていたガリラヤ人たちに同調していると非難したのである。
 - a. 彼らはさらにニコデモに対し、聖書を調べてみれば、ガリラヤから預言者が現れたことは一度もないと分かるはずだと挑発した。
 - b. 彼らの憎しみは彼らを完全に触み、真理を見る目を曇らせてしまった。何しろ、史上最も有名な預言者の一人であるヨナは、ガリラヤ地方のゼブルン族の町、ガト・ヘフェル出身であったのだから。（列王記下 14:25b）
 - C. 言うまでもなく、メシアがガリラヤからの光として来られるという、すでに触れたメシア的預言もある。
- B. これらの宗教的エリートたちは、権力への渴望によってあまりにも高慢で墮落していたため、自分たちの意見に反する提案をする者や、キリストに味方する者に対してさえ、怒りと軽蔑に満ちていた。
1. 彼らは高慢によって目がくらみ、自分たちと異なる考えを持つ者を嘲笑した。
 2. 彼らの高慢とキリストへの軽蔑、そして自ら物事を結びつけて理解しようとする意欲の欠如ゆえに、彼らは、まさに目の前に立ち、自分たちを招き寄せていたメシアを見逃してしまったのである。
 3. 高慢は、今もなお、イエスを認め、自分の人生をイエスに委ねる上での最大の障壁の一つです。人々は自分が間違っていることを認めたくありません。自分の罪を認め、告白したくありません。

誰にも従いたくないがゆえに、自分の人生の主導権を手放すことを望まないのです。彼らは高慢に触まれ、真理を見失っているのです。

C. これこそが、当時の宗教指導者たちに起こったことです。彼らは、キリストに対する高慢と憤りによって目がくらめられ、これまでにないほど偉大な招きを見逃してしまったのです。

1. キリストのもとに来て彼を知り、彼らのメシアであり、神の御子その方との交わりと親交を持つこと。
2. 神の御霊が単に彼らを満たすだけでなく、彼らからあふれ出し、彼らを通して、そして彼らから働きかけること。彼らは高慢のゆえに、これらすべてを見逃してしまったのです。
3. そして、私たち一人ひとりが自問すべきことは、何が私たちをこの招きを受け入れることから遠ざけているのか、ということです。この招きは私たちすべてに向けられています。単に救いを得るためにキリストのもとへ行き、御霊を内に宿すだけでなく、御霊が「生ける水の川」のように、私たちを通して周囲の世界へと活発に流れ出るようになるためです。
4. イエスの招きは、今日もお有効です。イエスを渴望するすべての人に対して、イエスは「*わたしのもとに来なさい。わたしを信じなさい*」とおっしゃいます。そして、御霊が私たちを満たすだけでなく、私たちからあふれ出し、私たちを通して流れ出ることを約束してください。
5. それが、私たち全員に対する私の願いです。神の御霊が単に私たちの内にあるだけでなく、私たちから流れ出るようになることを願っています。

VI. 結び／聖餐式；

A. さて、これから私たちは食卓に集い、主の晩餐を執り行います。礼拝チームが前に進み出て、案内係が聖餐のパンとぶどう酒を配り始めます。ここで、皆さんに次のようにしていただきたいのです。

1. イエス様が私たちに与えてくださった招きを、皆で考えてみたいと思います。イエス様の元へ行き、神の聖霊に満たされ、あふれ出るようになること。
2. この聖餐の時間には、キリストがあなたのためにしてくださったことを思い出すだけでなく、キリストがあなたに何を望んでおられるかも心に留めておいてください。キリストは、あなたがこのような関係を築くことを望んでおられます。御霊があなたを満たし、あなたから溢れ出るような関係です。
3. 主への完全な献身を妨げてきた罪や障害があれば、それを告白してください。主の恵みと赦しを求め、御霊が溢れ出るほどにあなたを満たしてくださるようお願いしましょう。主の招きに応え、主があなたのために望んでおられるような人生を歩みたいという願いを告白してください。
4. そして、準備ができれば、あなたのために砕かれた御体と流された御血を思い起こしながら、聖餐の要素を召し上がってください。
5. 時間の都合上、普段のように再び前に出て聖書を朗読することはいたしません。祈りで締めくくり、聖餐の時間に神の絶え間ない臨在と祝福が注がれるようお願い、その後、礼拝チームが聖餐の時間を締めくくり、最後の賛美の歌をもって礼拝を終了いたします。それでは、祈りましょう。